

# 2016WORLD ROWING SENIOR, U23 & U19 CHAMPIONSHIPS REPORT 13 (8/27)

いよいよ、日本チームにとって最終日を迎えました。本日はジュニアの4クルーが1日に2レースを漕ぎます。シニアチームはLW1x上野選手がFinal Cに、LM1xの池田選手、LM2-の奈良選手・小林選手がFinal Bへ挑みます。



9:30 JW4x SemiFinal C/D: GEO JPN LTU AUT

逆風が強く、体重の軽い日本チームには不利なコンディション。500mをトップから3秒差の3位で通過する。3位までがFinal Cへ進む。このまま3位以内を保ちたいところ。この段階で4位のジョージアは大きく遅れを取る。1000mを過ぎ、2位のリトアニアまで逆キャンバス差まで詰める。1500mを過ぎ、トップはオーストリア。少し離れてリトアニア、日本が続く。ラスト500m、上位3クルーは特段、レート上げることもなく、手堅く3位以内を保ったまま、そのままゴール。午後のFinal Cへの進出を決めた。



上：JW4x: S:松井選手（今治西高校）3:河原選手（若狭東高校）、2:宇都宮選手（今治西高校）、B:四方選手（朱雀高校）、下：JM4x: S:吉田選手（加茂高校）、3:江島選手（青井高校）、2:石塚選手（田村高校）、B:河畑選手（美方高校）

9:40 JM4x SemiFinal C/D: CRO JPN AUT ITA NOR CHN

相変わらず逆風。3位以内がFinal Cへ進みます。何とか3位以内を確保したい。500mを4位で通過。2位集団に1.4秒程度の差。まだまだ追いつけるところにつける。このまま後半勝負へ持って行き3位以内に入りたい。ところが、逆風の影響からか、体重の軽い日本チームはズルズルと引き離され1000mを6位で通過。3位とは5秒程度の差。しかし、4位から6位までが艇が重なる接戦。このまま、4位・5位のクルーを追い抜き、何とか3位まであがりたい。トップはオーストリア、続いてイタリア、ノルウェー、中国、クロアチア、日本となる。1500mを過ぎると、5位からも水を開けられる。テンポを上げるが、そのまま6位でゴール。Final D進出が決まった。

10:25 JW2x SemiFinal C/D: NOR JPN POL MEX AUT ZIM

日本は500mは4位。トップから1秒差につける大健闘。しかし、そこからトップ集団、4位集団、6位というように3つのグループに分かれてしまう。日本は4位争いを繰り広げる。1000mを過ぎ、力尽きたかのように、遅れ始め、1500mを5位で通過。メキシコ、ポーランド、オーストリア、ノルウェーのトップ集団から大きく置いていかれる。逆風が不利に働くのか、一生懸命漕ぐものの差は開く一方。そのまま5位でゴールし、Final Dへ進んだ。

10:30 JW1x SemiFinal C/D: TUN MDA PER JPN EGY UZB

上位3位に入ればFinal Cへ進む。大門選手がスタートから飛び出し、トップを走る。500mの時点で2位に5秒程度、4位とは8.6秒の差をつけ余裕の展開。レートは25程度と低く、午後にあるレースを意識しての漕ぎ。それでも他のクルーには追いつかれず、1500mを通過。1500m地点では4位とは9秒の差に。さらにレートを落とし、ゆったりと大きく漕ぎながらも1位をキープ。他の上位2艇も同じように大きくゆったりと漕ぎながらゴール。大門選手も1位のままゴールし、Final Cへ進んだ。

10:55 LW1x Final C: JPN NED GER CHN CZE ITA

上野選手はスタートから遅れ5位。500m地点ですでにトップと8秒の差。4位とは2秒以内の僅差。その後も4位の選手とデッドヒートを続ける。1000mで1秒差。何とか逆転すべく粘る。しかし、1500mでは差が1.5秒と少しだけ開く。トップはドイツ、続いて、中国、チェコ、オランダ、日本、イタリアの順。その後も、アタックを繰り返すが、差は詰まらず、そのまま5位でゴール。全体で17位となった。



上：JW2x: S:新田選手（美方高校）、國元選手（唐津商業高校）、下：JW1x 大門選手（日田林工高校）



上：LW1x: 終盤必死に追上げる上野選手（明治安田生命）

下：LM1x: ラスト250mでトップのスペインの選手を追い詰める池田選手（トヨタ紡織）

11:20 LM1x Final B: JPN USA CRO ESP SUI ITA

QuaterFinalで6分台を叩きだした池田選手。スタートから落ち着いた漕ぎを見せる。500mでトップから2.83秒差の3位につける。セカンドクォータでイタリア、スペインから少し離されるも3位のまま。その後、QuaterFinalで見せた漕ぎを思い出したかのように、テンポを上げ始める。1500mではトップと1.04秒差の2位。更にテンポを上げトップに立つ。そのままゴールするかに見えたが最後の最後に差し返され0.24秒差の2位でゴール。総合8位となった。男子軽量級シングルスカルとしては2002年長谷等選手が6位に入って以来の最高順位となった。

11:25 LM2- Final B: ESP ITA BRA JPN GER RUS

逆風のなかスタート、500m地点ではトップと0.63秒差でトップにピッタリと付ける。ドイツ、ロシア、日本がトップ争いをする。その後、ドイツを抜き去り、残るはロシアのみ。1000m手前でロシアの前に出ると、そのままぐんぐんと相手を突き離し、終わってみれば2位以下に5秒以上の大差を付けてトップでゴール。総合7位となった。男子軽量級舵手なしペアとしては2007年溝辺選手（東レ滋賀）・片岡選手（明治安田生命）が記録した7位と並び、過去最高順位となった。



LM2-: 2位以下に大差をつける奈良選手（新日鐵住金）・小林選手（戸田中央総合病院RC）

#### 15:05 JM4x Final D JPN EST ARG CHN CRO SLO

日本はスタートから前に出て積極的なレースを仕掛けたい。しかし、思いとは裏腹に、500mをトップのスロバキアから5秒近く遅れて5位で通過。その後もペースが上がらず1000mのち点ではトップに16秒の大差を付けられる。しかし、4位のアルゼンチンとは5秒差で何とか追いつくことが出来そうな位置にいる。日本は第3クォーターに入り、アルゼンチンとの差を詰めに掛かる。1500mではその差を3秒まで縮め、逆転可能な位置に付ける。その後、500mのラップにして10秒も速くなる猛烈なスパートをかけるが追いつかず5位でフィニッシュ。総合23位となった。

#### 15:25 JW2x Final D ZIM JPN MAR NOR LAT

毎回積極果敢なレースを見せてくれる2人が、この日も多くの人に感動を与えるレースをしてくれた。日本はトップのラトビアに4秒以内の2位に付ける。この段階で3位のノルウェーとは1.5秒差。その後も、トップのラトビアには離されるものの、ノルウェーとの差を広げ1000mで2秒の差。第3クォーターに入ると日本は全クルー中トップのタイムを出し、トップとの差を詰めに掛かる。しかし、トップのラトビアとの差はなかなか縮まらない。3位ノルウェーとは3.5秒の差に広がる。1500mを超え、ノルウェーの猛烈なスパートが始まる。日本も必死に逃げるが逃げきれず3位でゴール。総合21位でレースを終えた。



JW2x: レース直後の新田選手（美方高校）・國元選手（唐津商業高校）

#### 15:40 JW4x Final C JPN LTU RUS CAN AUT

JW4xも毎回積極果敢なレースをしている。Final Cでも積極的なレースを見せてくれた。日本はスタートから飛び出し500mではトップのオーストリアと並び2位。その後も、オーストリアについていく。そのまま、1000mを過ぎたところで、徐々にペースが落ち始め、3位だったカナダに抜かれ、1500mでは逆にそのカナダに4秒の差をつけられる。ラストクォーターでその差を詰めにかかるが、すでに余力は残っておらず3位でゴール。総合15位と大健闘を見せた。



終盤必死に食い下がるJW4x: S:松井選手（今治西高校） 3:河原選手（若狭東高校）、2:宇都宮選手（今治西高校）、B:四方選手（朱雀高校）

#### 16:10 JW1x Final C UKR MDA PER ZIM JPN DEN

大門選手にとっては格下の相手との戦いとなる。得意のスタートで飛び出し、2位以下を大きく引き離す。会場の解説でも大門選手のダイナミックで綺麗な漕ぎが再三紹介される。500m以降も着実に差をつけ1500mの段階で14秒以上の差を付ける。そのまま余裕の1位。全体で13位となった。Final BもしくはFinal Aで戦う力は十分にあると思われる。次は、U23カテゴリーになるが、U23カテゴリーでも自分の才能を信じて戦って欲しい。



2位以下に大差をつけるJW1x: 大門選手（日田林工高校）

今大会は3カテゴリー（シニア・U23・ジュニア）の合同の世界選手権でした。レーススケジュールも非常にタイトなレースであり、選手たちはコンディションの調整が大変だったと思います。そんな中、上のカテゴリーの選手の戦う姿は若い世代の選手に大いに影響を与え、また、夢と希望に満ち溢れた若い選手たちは、上のカテゴリーの選手に元気を与えてくれました。各世代の選手が国の代表としての自覚と自分たちの役割をきちんと果たそうとした結果、大会期間中に好循環が生まれ、各種目での健闘に繋がったと思います。オープンカテゴリーに挑むU19の選手たちの姿に多くの選手・スタッフが心を打たれました。また、ほぼ無風状態にも関わらず、日本で4人目となる6分台スカラーも生まれました。ラストで世界の強豪を抜き去るペアも生まれました。チーム最年少（高校1年生）の新田選手（美方高校）とそのペアの國元選手（唐津商業高校）の頑張りは日本チームに大きな勇気を与えてくれました。また、現地でサポートしてくださった井上千春様には多大なご支援をいただきました。感謝申し上げます。また、日本から応援していただいた皆様、確実に選手の力となりました。感謝いたします。この経験を元に、日本代表チームはさらにステップアップしていきます。今後ともよろしく願いいたします。

